2014年大河ドラマ「軍師官兵衛」

初代中津城主
黒田官兵衛をたどる

豊臣秀吉の軍師として戦国の時代を生き、その天下統一を助けた黒田官兵衛孝高。
天正15年（1587）、豊前国6郡を与えられて入部した官兵衛は、
領内の検地を行い新たな統治を目指しますが、それに従わない豪族宇都宮一族が立ちはだかりました。
宇都宮鎮房を中心とした一揆の抵抗は激しいものでしたが、最後は鎮房が降伏して戦いは終息を迎えます。
官兵衛は、拠点を中津の地に定め、居城の築城と城下町の造営に着手しました。
領内の平定を目指す黒田氏は、鎮房をこの中津城へ誘い出して討ち取り、宇都宮一族は滅びました。
悲しい歴史ですが、反乱を抑え豊前国を平定した官兵衛は、
中津市にとって戦国の世から平和の時代へ変える礎を築いた人物なのです。
戦いが繰り広げられた城跡や、当時の高度な技術を用いて造らせた中津城石垣、
城下町やゆかりの寺院神社など、市内に残る官兵衛の足跡をたどります。

2013年1月発行 中津市教育委員会

築城前夜
―黒田官兵衛と地元豪族の戦い―

黒田官兵衛孝高の生涯 ※色字は豊前・中津での出来事

1546(天文15年) 播磨国姫路に、小寺氏の家老黒田職隆の嫡男として生まれる。
1567(永禄10年) 家督を継ぎ、姫路城代となる。
1575(天正 3年) 織田信長に謁見。秀吉の配下に入る。
1577(天正 5年) 中国地方征伐のため姫路城を秀吉に差し出す。
1578(天正 6年) 荒木村重が信長に離反。説得に有岡城に向かうも捕縛され幽閉。
翌年救出される。
1581(天正 9年) 鳥取城攻め。兵糧攻めを行う。
1582(天正10年) 備中高松城攻め。水攻めを行う。本能寺の変。
1583(天正11年) 大坂城築城に際し、普請奉行となる。
キリスト教の洗礼を受ける(洗礼名:ドン・シメオン)。
1585(天正13年) 四国征伐。
1586(天正14年) 九州征伐の先鋒を務め、豊前国に侵攻。
1587(天正15年) 7月、豊前6郡を拝領。入国し領内の検地を始める。
10月、宇都宮鎮房を中心に豊前の国人が蜂起。
11月ごろ、長岩城の野仲鎮兼を攻める。
12月、下毛の諸城を攻め落とし一揆鎮圧。
1588(天正16年) 正月、中津城築城開始。
4月、城内にて宇都宮鎮房を討つ。
合元寺にて鎮房の兵300人が討たれる(赤壁寺)。
1589(天正17年) 家督を嫡子長政に譲り、文禄2年頃「如水」と号す。
1590(天正18年) 小田原城攻め。
1591(天正19年) 肥前名護屋城の縄張りを命じられる。
1592(文禄 元年) 文禄の役。宇喜多秀家の軍監として朝鮮に渡る。
1597(慶長 2年) 慶長の役。小早川秀秋の軍監として参加。
1599(慶長 4年) この頃、中津城下にイエズス会のレジデンシヤ(駐在所)を建設。
1600(慶長 5年) 9月、関ヶ原の戦い。九州では石垣原の戦いが起こる。
官兵衛軍は中津より出陣、石垣原(別府市)にて大友軍を撃破。
長政の筑前52万石移封に伴い、福岡に移る。
1604(慶長 9年) 京都にて逝去。葬儀は博多の教会で行われる。
墓は博多の崇福寺(黒田家菩提寺)にある。

黒田氏の宿命のライバル・宇都宮氏とは

下野国二荒山(宇都宮)座主であった藤原宗円が宇都宮氏を名乗ったのを始まりとしています。四代信房は平家の追討に武功をあげ、文治元年(1185)7月に豊前国仲津郡城井荘地頭職を得て、九州に下向しました。鎮西宇都宮氏の初代となった信房は、弟や子を豊前の谷々に置き、勢力を大きくしました。戦国時代には本家の宇都宮鎮房や宇都宮一族の野仲鎮兼らが、先祖伝来の土地を守りつづけました。

天正15年(1587)黒田官兵衛が豊前6郡の大名として入部しましたが、宇都宮一族は鎮房を中心に一揆し、これに対抗しました。幾度もの合戦が行われ、いくつもの城が落城しました。下毛郡では、長岩城の野仲氏が一族最大級の兵力をもって抵抗し、また、下毛の豪族たちも一揆を起こしましたが、黒田軍の前に敗れました。最後の当主宇都宮鎮房は降伏するも、官兵衛が新たに築いた中津城内にて討たれ、宇都宮氏は滅びました。

池永城跡(中津市大字上池永)
城屋敷という字が残ります。天正15年12月、鷹神社大宮司であった池永重則が黒田氏に叛旗し、鷹神社神官らが攻防を繰り広げ落城したと伝えられています。

犬丸城跡(中津市大字犬丸)
黒田氏に叛旗した犬丸越中守清俊の居城跡。天正15年12月落城。
清俊は秣氏を頼り敗走するも、黒田方についた秣大炊介によって討たれました。

田丸城跡(中津市大字福島)
長久寺境内が城跡です。田丸城には福島佐渡守祐了が篭りました。天正15年12月に攻められると降伏出家し、城を寺となしたといわれています。
現在、堀や土塁が残り、当時の様子を伝えています。

中津城跡(市指定史跡)・・・P4

高森城跡(宇佐市大字高森)
官兵衛の弟利高が築いた城跡。堀や土塁が残っています。

城井谷(福岡県築上町)
宇都宮氏の拠点。館を中心に、いくつもの山城が存在しました。鎮房は城井城を拠点に、黒田軍に対抗しました。天正16年1月、宇都宮家の滅亡とともに落城しました。

土田城跡(三光土田)
城主百富(留)河内守は黒田氏に従い、長岩城攻めに参陣しました。

秣城跡(三光上秣)
城主秣大炊介は黒田氏に従い、犬丸殿と加来殿を討ち取りました。

大畑城跡(中津市大字加来)
黒田氏に叛旗した加来安芸守統直の居城跡。黒田・吉川両軍に攻められ天正15年12月落城。統直は大友氏を頼り敗走するも、途中秣氏の兵によって討たれました。大畑城落城を最後に豊前一揆は鎮圧されました。(市指定史跡)

長岩城跡(耶馬溪町大字川原口)
建久9年(1198)、野仲重房がこの山頂に城を築いたのが始まりとされます。野仲氏は宇都宮氏の一族で、鎌倉時代に下毛郡の地に土着し、戦国時代には本家である宇都宮氏に並ぶ勢力にまで成長しました。天正15年11月、城主野仲鎮兼は豊前に入った黒田官兵衛に叛旗し、黒田勢に攻められて落城しました。
長岩城は、麓との標高差230mの高所に築かれた要害で、本丸・西の台・東の台と呼ばれる郭を中心に石積で守られた城戸や、三日月塹壕と呼ばれる長大な竪堀などが残っています。(県指定史跡)

後藤又兵衛の墓
(耶馬溪町大字金吉)
後藤又兵衛は黒田二十四騎の一人。大坂の陣で戦死したとされますが、伊福の谷には生き延びた又兵衛が移り住んだと伝えられ、その墓が残っています。(市指定史跡)

一ツ戸城跡(耶馬溪町大字宮園)
一ツ戸の領主中間氏の居城跡。城主中間統胤は官兵衛の傘下に加わりました。一ツ戸城は、豊後・筑後との国境に近かったため重要視され、中間氏はそのまま城番として置かれました。
城跡には細川期に整備された石垣などが残っています。(市指定史跡)

平田城跡
(耶馬溪町大字平田)
白米城とよばれる城館跡。もとは野仲氏の支城でしたが、長岩城落城後、黒田二十四騎の一人栗山利安に旧領が与えられ、利安は平田城を居城としました。黒田騒動で有名な栗山大膳は利安の子で、幼少期をこの城で過ごしました。現在、城跡には黒田時代の石垣の一部が残っています。(市指定史跡)

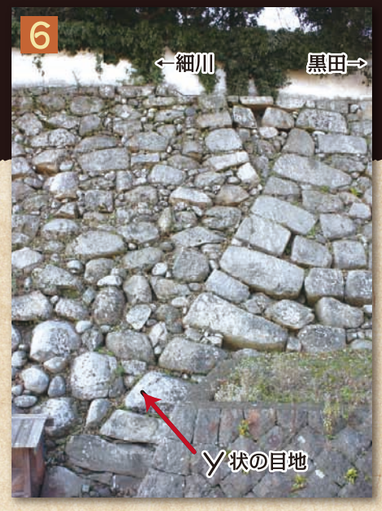
官兵衛が九州で初めて築いた城～中津城～ これが黒田の石垣だ

河口を選んだ官兵衛の想いにふれる

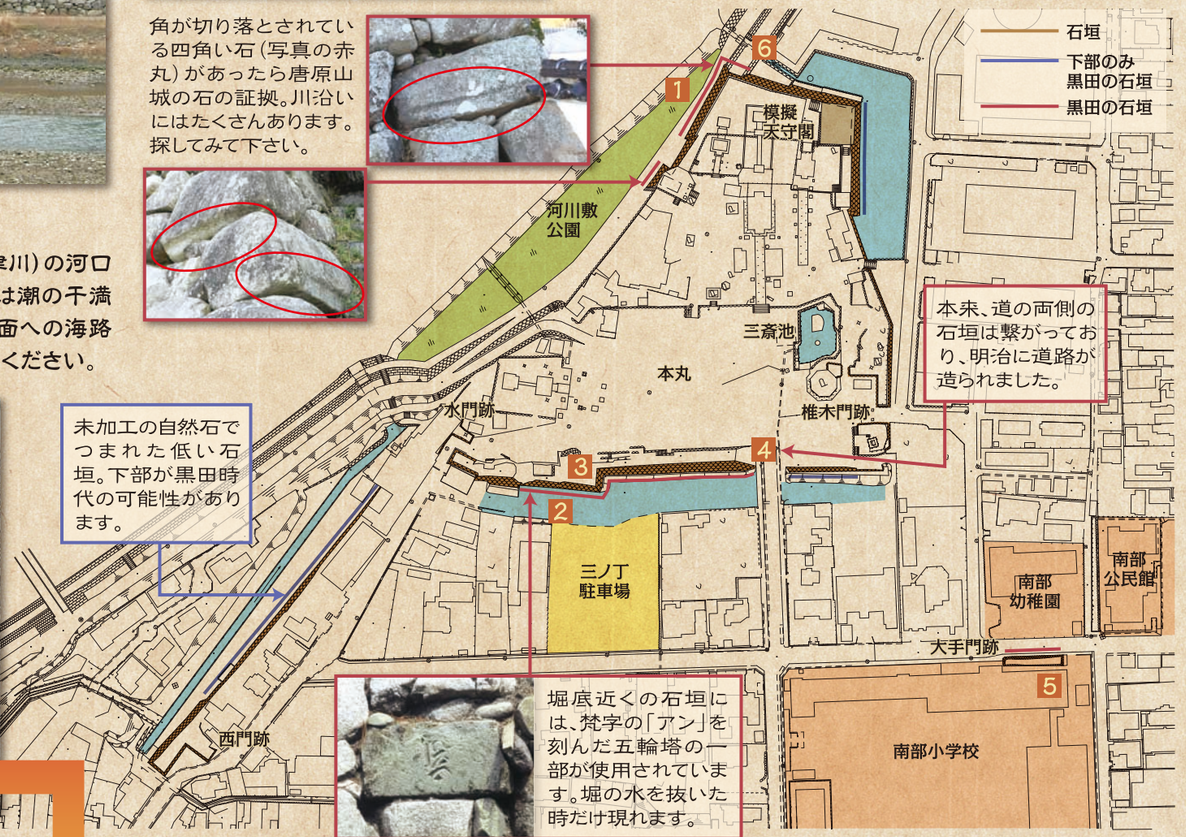
1587年、豊前に入国した黒田官兵衛は、1588年、高瀬川（現；中津川）の河口で築城にとりかかりました。西は川、北は海を自然の要塞とし、堀の水は潮の干満で循環します。河口に築城したことによりいざという時に備えて関西方面への海路を確保しました。ぜひ本丸西側の川沿いに降り、官兵衛の想いを感じてください。

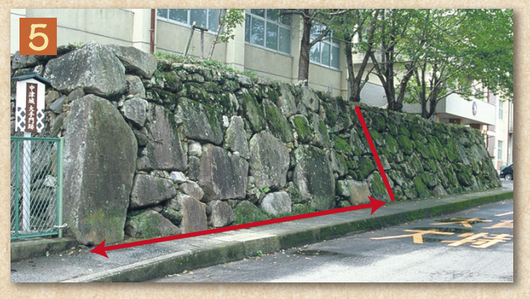
中津城築城～官兵衛、知恵の見せどころ

本丸北側には、石垣にY状の目地が通る場所があります。川沿いの四角く加工された石が黒田の石垣。その上にのる自然石が細川時代の石垣として有名です。本来、黒田時代は自然石の石垣のはず…実は、官兵衛は中津城築城の際、川上にある福岡県上毛町の7世紀の遺跡～国指定史跡「唐原（とうばる）山城」の石を持ち出し石垣を築いたのです。その結果、川沿いから北側にかけて、ほぼ7世紀の山城の石のみを使用した石垣ができあがりました。直方体で、一辺が断面L字にカットされているのが目印です。
「早く、効率的に」ー官兵衛、知恵の見せどころです。



角が切り落とされている四角い石（写真の赤丸）があったら唐原山城の石の証拠。川沿いにはたくさんあります。探してみて下さい。



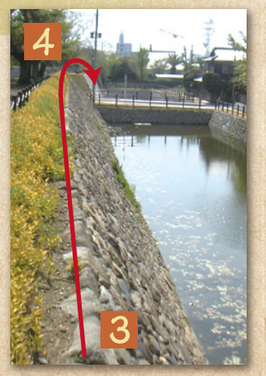


南部小学校には大手門の石垣の一部が残っています。上の写真の手前から赤線部分までが黒田時代。その後継ぎ足されます。門周辺に使用される大きな石は威容を示すためのもので、奥行きがなく大変薄かったことがわかっています。

黒田時代の典型的な石垣はココ

官兵衛が築いた石垣には、当時の最高技術である穴太積みの技法が用いられています。

石は全て花崗岩の自然石。ノミで削った痕跡が一切なく、石の本来の特徴を活かして積まれています。石の角は直線的にのび、反りがなく、また石垣上の3に立ち4方向と水門方向を見ると、石垣がゆるやかなカーブを描いているのがわかります。「輪どり」といって、カーブさせることで石垣をくずれにくくする技法です。



三ノ丁駐車場から正面に見える出角周辺が「最も黒田時代らしい石垣」です。

低く幅が狭かった黒田の石垣

黒田時代の石垣は高さ5.8mで、今より低く、天端幅が2.4mと狭かったため、石垣に段差をつけ、低く幅の広い場所に櫓を建てました。石垣の中から櫓跡が発見されています。

左の写真と下の図の赤線が黒田時代の高さを示します。細川時代以降、石垣は継ぎ足され高さ7mに、天端幅は6mと広がり、石垣の上に櫓を建てました。

※イメージ図

大鳥居横の石垣断面に注目！
上の写真の、赤矢印が黒田時代の石垣幅。徐々に城内側へ石垣が足され広げられていく様子がわかります。これにより、堀に面した石垣は、最も古いものであることがわかります。

黒田氏の町づくり── 旧中津城下町の遺構

黒田氏が天正16年(1588)に、中津城の築城を始め、それ以後中津城下町はつくられていきました。現在の旧中津城下町にも、町割りや、神社仏閣、町名など、黒田時代に由来するものが多数存在しています。

黒田時代の町割り

現在残る旧中津城下町の町割りは、小笠原時代の承応(じょうおう)元年(1652)頃にほぼ完成したといわれています。

しかしながら殿町で行った発掘調査で、黒田時代の家の境(溝)が確認されました。この家の境は幕末の絵図と一致し、さらに幕末の絵図の町割りは現在の町割りとほぼ同じです。このことから、現在の城下町の町割りは、黒田時代の町割りを踏襲していることがわかりました。

※幕末の絵図より一部抜粋

コラム:城下の要塞〜中津城のおかこい山〜

外堀と中堀の城内側には、城下の守りをより強化するため、堀を掘った土を盛った「おかこい山」といわれる土塁が築かれました。

細川時代には完成したと考えられていますが、その始まりは黒田時代にさかのぼる可能性があります。

現在でも「おかこい山」は各所で見ることができます。城下を囲む総構えの土塁が残る城下町は、九州では中津城が唯一であり、大変貴重な遺構です。

幕末の絵図に描かれているおかこい山

1 三ノ丁(さんのちょう)おかこい山(市指定史跡)

中堀のおかこい山。東西約32m、高さ約2m。一部に石垣があり、この上に櫓が建てられていたと考えられる。松田歯科駐車場より見学可能。

2 自性寺(じしょうじ)おかこい山(県指定史跡)

中津藩主奥平家歴代の菩提寺の自性寺周辺に、南北150m、東西230m、高さ約5mの規模で、外堀のおかこい山が残存。そのうち西側の南北約120mが県指定範囲。

3 金谷口(かなやぐち)おかこい山(市指定史跡)

外堀のおかこい山。「金谷口」と呼ばれる、城下から南側の金谷武家屋敷への出入口西に位置。東西約130m、高さ約4m。

4 鷹匠町(たかじょうまち)おかこい山(市指定史跡)

外堀のおかこい山の一部で東西16m、南北10mの範囲に土塁が残存。復元整備工事され自由に見学可能。

3 合元寺(ごうがんじ)(通称:赤壁寺)

天正15年(1587)に黒田官兵衛(かんべえ)に従い中津にきた空誉上人(くうよしょうにん)の開山です。

黒田氏は中津城内で宇都宮鎮房を討ち、合元寺で待機していた従臣たちを殺しました。その時の血が何度塗り替えても染み出てくることから、遂に壁を赤色に塗るようになり、「赤壁寺」と呼ばれています。寺の庫裏(くり)の柱には当時の刀傷が残っています。

城下町の町名について

旧中津城下町は、江戸時代に使われていた町名が現在でも残っています。特に、東側に位置している「姫路町」、「京町」、「博多町(現在の古博多町)」は、黒田時代から町名がすでに存在していたようです。

1 姫路(ひめじ)町

当時の城下町屋の中心でした。黒田氏が中津へ入封した際に姫路の商人達が来てつくった町ということに由来しています。

2 京(きょう)町

黒田氏が中津に入封した際、京町中ノ辻の町屋・伊予屋を本陣として中津城をつくったという説があり、京町は古くから存在していたと考えられます。京都からの移住者がいたことが由来とされており、その町名は黒田時代を描いたとされる「黒田如水縄張図」にも記されています。

3 4 古博多(ふるはかた)町・新博多(しんはかた)町

黒田時代(他の説あり)に博多の商人が移住して店を構えたので「博多町」と呼ばれました。京町とともに「黒田如水縄張図」に記されています。元和6年(1620)細川忠興(ほそかわただおき)の「町割令」により、町の南側の堀を埋めて「新博多町」が作られ、「博多町」は「古博多町」と呼ばれるようになりました。

1 城井(きい)神社

中津城で黒田氏に誘殺された宇都宮鎮房(うつのみやしげふさ)は、この地に埋葬されました。宝永2年(1705)に中津藩主小笠原長円(ながのぶ)が「城井大権現(きいだいごんげん)」として、城の守護神として祀るようになりました。

2 扇城(せんじょう)神社

黒田氏に殺された宇都宮氏の従臣が祀られています。宝永2年(1705)に中津藩主小笠原長円が宇都宮鎮房を城井大権現として祀るとともに、従臣を稲荷大明神として祀ったことが始まりです。

4 円応寺(えんのうじ)(通称:河童寺(しんよしょう))

黒田官兵衛(かんべえ)による開基で、真誉上人(しんよしょうにん)の開山。黒田氏が福岡に移った後も細川氏、小笠原氏など歴代の藩主に大切にされました。境内の「河童の墓」は、黒田二十四騎の一人・野村太郎兵衛(たろうべえ)の墓ともいわれています。

5 西蓮寺(さいれんじ)

開基・光心(こうしん)師は俗名「黒田市右衛門(いちえもん)」といい、黒田官兵衛の末の弟です。父・黒田美濃守職隆(みののかみもとたか)の逝去に伴い出家したといわれ、官兵衛を慕って中津に移り、天正16年(1588)に当寺を開山しました。

遺物は語る

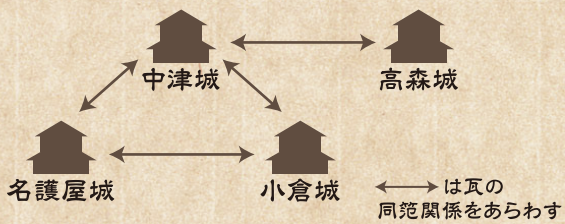
豊臣とのつながり

中津城内では秀吉の家紋である桐の葉文様の軒丸瓦や桐の葉の形の鬼瓦片が出土しました。桐の葉の文様を用いることは秀吉との親密な関係をあらわします。
また、1点ですが、金箔をはった鬼瓦片が出土しました。九州では肥前名護屋城など豊臣との関係の強い城郭から出土しています。大分県下では城郭から出土したものとしては初めてです。

近隣の城郭とのつながり

※○は、同笵と判断する決め手となった傷

中津城から出土した瓦の中には、秀吉の朝鮮出兵の拠点である名護屋城（1591～1598）や、16世紀末の小倉城、中津城の出城であった宇佐の高森城と同じ笵でつくった同笵（どうはん）瓦が複数確認されています。瓦の文様面に残る笵傷が、同じ笵木で型をとった証拠です。同笵瓦は年代決定の有効な決め手となり、瓦の流通や他の城との交流など多くの情報を物語っています。



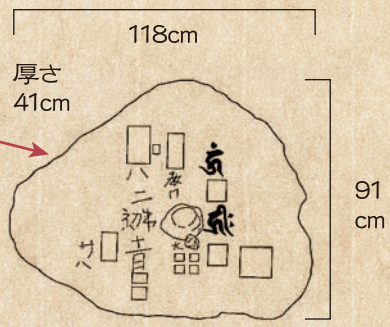
小倉城と同笵

名護屋城
と同笵

小倉城
名護屋城と同笵

黒田時代の大型礎石建物の謎

本丸南東隅の調査で、大型礎石建物の存在が明らかになりました。一段高くした基壇上に、最大径1.6m、厚さ70cmの大型礎石が据えられていました。礎石とともに多量の塼（せん）（正方形でタイルのようにしきつめる瓦）と、名護屋城と同笵の瓦が出土しました。



墨書解読図

礎石の横には、表面に墨で多くの文字を書いた石が廃棄された状態で出土しました。石の中央には貫通していない穴があり、文字はその穴を避けるように配置されていました。右端の4つは梵字と思われ、内二つは解読できています。中心の穴は鎮壇具を収めた穴と考えると、寺院の塔心礎のようなものと考えられます。この石と大型礎石はおそくとも細川の時代には廃棄されたようです。黒田時代に、本丸内に仏教的な建物が建っていたのでしょうか。

「黒田如水縄張図」や中津城跡出土の黒田関係の遺物（瓦、陶磁器等）は、中津市歴史民俗資料館に展示しています。

中津市歴史民俗資料館

〒871-0055 大分県中津市1385番地（殿町）
TEL 0979-23-8615

- 開館時間　午前9時～午後5時 ※入館は午後4時30分まで
- 休 館 日　毎月第4水曜日・12月28日～1月3日・臨時に定める日
- 入 館 料　無料
- 交通案内　JR九州 日豊線中津駅から徒歩10分

表紙写真：「黒田如水画像」大分県立歴史博物館 所蔵